氏名（本籍）	金　堀　哲　也（福　岡　県）
学位の種類	博士　（コーチング学）
学位記番号	博甲第　7077　号
学位授与年月日	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	野球の打撃における指導者の着眼点に関する研究

主　　査	筑波大学教授	博士（学術）	山　田　　幸　雄
副　　査	筑波大学准教授		川　村　　卓
副　　査	筑波大学准教授	博士（体育科学）	谷　川　　聡
副　　査	筑波大学教授	博士（学術）	藤　井　　範　久

論　文　の　要　旨

＜目的＞

野球の打撃に関する研究の多くは，バイオメカニクスの手法を用いて打者の動作を客観的に評価してきた．一方，実践現場では複合的に生じる課題の克服が求められることから，研究結果の実践への応用が困難になっている．そこで，実践現場で複合的に生じる課題を的確に捉え，指導を行っている指導者の着眼点に関する研究が増えてきているが，指導者が主観的に捉えている着眼点と実際の動作を客観的に評価し，それらの関係性について検討した研究はほとんどない．

そこで本研究は，野球の打撃において指導者が共通して認識している一般的で包括的な着眼点と指導者に評価された選手の客観的な動作の比較を総合的に検討することで，打撃指導における着眼点に内包する応用可能な意味を明らかにし，野球の打撃に関する研究およびコーチングへの示唆を得ることを目的とした．

＜対象と方法＞

本研究では，2 つの研究課題を設定した．

研究課題 1. 野球の打撃における指導者の着眼点を収集・整理することで，指導者が効果的な打撃を行うために重要だと認識している，一般的で包括的な着眼点を明らかにした．分析対象は，過去 10 年間において日本で出版された野球の指導書 40 冊を選定し，打撃のスイングに関する記述（以下，テクストと示す）を抽出した．各テクストに，① 動作局面（どの局面に対する指導なのか），② 意識の対象（どの部位に関する指導なのか）についてのラベリングの作業を 3 名の研究者で，なおかつ野球の指導者が行い，3 名の意見が一致するまでトライアンギュレーションを行った．分析は，3 名の意見が一致したテクストを対象に，動作局面における意識の対象の表出数のクロス集計を用いた残差分析を行い，調整済み残差を算出し，指導者が効果的な打撃を行うために重要だと認識している，一般的で包括的な着眼点を抽出した．

研究課題 2. 現場の指導者が主観的に評価した選手の動作をキネマティクス的に比較すること

で，野球の打撃において指導者が選手を評価する際の着眼点を客観的に評価し，FG(First superior group)群と SG(Second superior group)群間の違いについて検討した．対象は大学野球チームとした．チーム指導者 3 名の主観的評価によって選定された選手の打撃動作を，さらにチーム外指導者 1 名が主観的に評価し，選定した．以上の選定において，4 名の評価が一致した選手の打撃動作をキネマティクス的に分析し，FG(First superior group)群と SG(Second superior group)群間の違いについて検討した．

＜結果＞

研究課題 1. 動作局面と意識の対象との間の表出数をクロス集計して残差分析を行った結果，すべての動作局面において 1 つ以上の意識の対象に有意差が認められたことから，指導者は全身を包括的にとらえた全体的な指導と，身体部位を細かく対象とする部分的な指導を区別しており，各動作局面において共通の部位に着目して記述していることが明らかになった．また，指導者共通の着眼点から，指導者はテイクバック局面とステップ局面では『下肢』に，アプローチ局面では『体幹』と『腰』に，フォロースルー局面では『上肢』に共通して着眼していることから，指導者が着目する部位は動作局面の前半から後半に進むにつれて『下肢』から『体幹』,『上肢』へと移行する傾向がみられた．

研究課題 2. 現場の指導者が主観的に評価した大学野球選手の打撃動作をキネマティクス的に比較した結果，スイング速度や打球速度，体格要因などに差はみられなかった．一方，ステップ局面に要する時間や身体重心の移動距離に有意な差がみられ，それらに影響を及ぼすと考えられる下肢および腰の動作が生じるタイミングに違いがみられたことから，指導者は打者の体格要因やスイング速度よりも，投手とのタイミングに関する課題やそれに伴う動作を重要な着眼点としていることが示唆された．

＜考察＞

指導者が共通して認識している一般的な着眼点は，抽象度が高い包括的な意味内容の指導が多かった．一方，指導者の着眼点をキネマティクス的データで説明すると，具体的で部分的に説明することができた．このことは，指導者の着眼点と実際の動作を客観的に評価したデータを比較することで，指導者が実践現場では気付いていない新たな着眼点の発見に寄与できる可能性が示唆されたことになる．一方で，指導者の着眼点をキネマティクス的データで表すと，複数のデータによる説明になることが多くなるため，そのままキネマティクス的な表現を指導に用いると，指導内容が複雑化してしまうことが危惧された．よって，指導者は客観的データに頼りすぎず，包括的な意味内容による動作全体の指導と，動作全体の修正が困難であった場合の具体的で部分的な内容の双方の視点を持ち，指導状況に応じて指導内容を使い分ける必要性が示唆された．また，指導現場において指導者によって指導内容が異なるのは，指導者の着眼点に包括的な意味内容や部分的な意味内容が混在する中で，それぞれの指導者が経験的に重要だと認識している意味内容が異なるためであり，その違いが指導者の特徴として表れていることが示唆された．

審 査 の 要 旨

本論は野球の打撃における指導者がどのような点に着眼し選手の評価を行っているか，複数の客観的な観点から分析を試みており，その新規性，独創性は高く評価できる．また，本研究によ

り，打撃における選手の評価を一般化することが可能となり，コーチング学研究としての一つの方向性を示したものと考えられる．

平成 26 年 2 月 3 日，博士（コーチング学）学位論文審査委員会において，審査員全員出席のもとに最終試験を行い，論文について説明を求め，関連事項について質疑応答を行った結果，審査委員全員によって合格とされた．

よって，著者は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める．